CON MA

ハリイ・ライムの回想

詐欺師ミステリ傑作集

小鷹信光編

大和書房

ハリイ・ライムの回想
詐欺師ミステリ傑作集

1985年6月25日　第1刷発行

編　者　小鷹信光
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口　1-33-4
〒112　TEL（203）4511
振替　東京 6-64227
印刷所　高長印刷・東光印刷　製本所　誠幸堂

装画　かわぐち　せいこ　装幀　高麗隆彦

乱丁本・落丁本はおとりかえします　ISBN4-479-51019-2
© N. Kodaka 1985
Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ハリイ・ライムの回想

・おばあちゃんに脱帽
Little Old Ladies Can Be Dangerous
アガサ・トレッドワージィ　・ジャック・フォックス *Jack Foxx*　・5

・転職への道
Dropout
弁護士ワトキンス　・ジャック・リッチー *Jack Ritchie*　・28

・カモのお返し
Silver Nugget Honor
クラーク夫人　・トマス・A・イーガン *Thomas A. Egan*　・42

・広告欄の二人
Personal
ミスター・ハンディ　・キャメロン・ウイルス *Cameron Wills*　・48

・黒い帽子の男
The Man in the Black Hat
黒い帽子の男　・ロバート・ヴァラック *Robert Varak*　・59

・ネズミ捕り
Welcome Stranger
ガーヴィン&マック　・イライジャ・エリス *Elijah Ellis*　・75

・バードより愛をこめて
From the Bird, with Love
レナード・インマン　・クラーク・ハワード *Clark Howard*　・86

・幕間・詐欺師の手口教えます　The Big Con より　・三条美穂　・100
・贋作の報酬 *Art for Money's Sake*　贋作師カール・ウィドナー　・ジェイム・サンダヴァル *Jaime Sandaval*　・114
・カーミジンの偽札騒動 *Karmesin, Con Man*　詐欺師カーミジン　・ジェラルド・カーシュ *Gerald Kersh*　・124
・博愛主義的数学講座 *The Chair of Philanthromathematics*　山師ジェフ・ピーターズ　・O・ヘンリー *O. Henry*　・135
・マンハッタンの相場師 *Two Plungers of Manhattan*　弁護士ランドルフ・メイスン　・メルヴィル・デヴィスン・ポースト *Melville Davisson Post*　・146
・最後の一仕事 *Foxer*　老ぺてん師シロギツネ　・ブライアン・クリーヴ *Brian Cleeve*　・161
・ハリイ・ライムの回想 *The Lives of Harry Lime*　第三の男ハリイ・ライム　・オーソン・ウェルズ *Orson Welles*　・181
・編者あとがき・小鷹信光・215

世間には二種類の人間がいるんだ。利口なのと、ばかなのがな。

ロビン・ムーア『ペテン師どもに乾杯』
（宇佐川晶子訳）

あっしは相手になにかひきかえに渡さずにはびた一文だって巻きあげたりはしませんよ。

O・ヘンリー「詐欺師の良心」

タイミングというやつは、人生でもっとも重要なものの一つなんだよ。

エヴァレット・ロード・カースル「大佐のお別れパーティ」
（厚木淳訳）

騙されるよりは騙すほうがずっと楽しいことはまちがいない。

サミュエル・バトラー

おばあちゃんに脱帽

Little Old Ladies Can Be Dangerous

ジャック・フォックス

Jack Foxx

警備員室の机の前に坐って、ミルクを飲みながら朝刊を読んでいると、伊達男ジャック・サンプルの事務室に通じるインターフォンのブザーが、けたたましく鳴り響いた。

わたしはスポーツ欄から眼を離し、スウィッチを押した。「はい、何でしょうか?」

「モーガン、こっちに来てくれ。すぐだ!」

「何事です、ミスタ・サンプル?」

「つべこべ言うな。すぐにこっちに来るんだ!」

ボスがこんな言い方をする時は、ぐずぐずしないほうがいい。わたしは廊下に飛び出し、エレベーターには乗らず、階段を二段ずつ駆け上がった。伊達男ジャックの事務室は一階上、〈メロディ・クラブ〉

の最上階にある。このクラブはラスヴェガス大通りにある小さいが瀟洒なカジノで、彼はそのオーナー。
秘書室のドアを押し開け、金髪で豊満な姿態の秘書の前を通り過ぎようとして、不意に足が釘づけになった。秘書はオーナーのいる事務室に通じる開いたドアのそばに立ち、びっくりまなこで中を見つめている。わたしもあまりのことに眼を見開くしかなかった。
高価な人工革の回転椅子に坐った伊達男ジャックは、事務室の三分の一は占めている大きなクルミ材の机の隅に追いつめられている。頭をのけぞらせ、手はしっかと椅子の肘をつかみ、顔面は蒼白で、さきほど飲み残してきたミルクの色とたいして変わりがないほど白かった。額に玉のような汗が吹き出ている。
「モーガン！　モーガン！」彼はわめいた。
レースのついた丈の長い胴着を着て、灰色の毛糸のショールをまとった小柄な老婆が、彼のそばに立っている。木の柄のついた古くさい傘を振り回し、伊達男ジャックの鼻の下に傘の先をぐっと突きつけた。眼には怒りの炎が燃えたぎっている。
少しびっこを引きながら、わたしは尋ねた。「いったい、どうしたんです、ミスタ・サンプル？」
「このばばあをここからつまみ出せ！」伊達男ジャックは吠えた。「このばばあはアビ（平家鳥）みてえにぎゃあぎゃあわめきやがるんだ！」
わたしは老婆を飛びつき、傘を取り上げた。もぎとるようなことはしなかったのだが、刺すような視線を向けられた。「お若いの、あんたは？」
「トニー・モーガンです」わたしはすぐに返事をした。「ここの警備――」
「自己紹介なんぞ、どうでもいい。すぐにここからつまみ出せ！」伊達男ジャックはわめいた。
「わたしといっしょに来たほうがいいんじゃないかな、ばあさん」と言いながら、わたしはやさしくし

っかりと老婆の腕を取った。
老婆はわたしの手首をぴしゃりと叩いた。「サンプルさんが、クリストファーとあたしの金を返さなきゃ、一歩たりとも動かねえ」
「金？」
「十万ドルだよ」老婆が答えた。
わたしは伊達男ジャックに眼をやった。組み合せ文字の刺繍が入った絹のハンカチで額の汗を拭っている。
「あんたに渡す金なんぞ、びた一文ない」彼は老婆に向かって言った。
「おまえはあたしの金を盗んだ」
「何も盗んじゃいない」
「いいや、おまえは盗んだ」
「なあ、ばあさん——」
「亡くなった亭主のクリストファーを、おまえはこの悪徳の巣、罪で汚れた館におびき寄せたんだ」老婆の言い分にも一理あった。「ぼろ儲けできると甘い言葉で誘っておいて、あげくのはてに、あたしたちがこつこつ貯めたトラの子を巻き上げてしまったんだ。この人非人、ひとでなし！」
「あんたの亭主に会ったことは——」
「人殺し！」老婆はくぐもった声で言った。「歓楽の道に足を踏み入れた悪漢め！」
「ばあさん、何度言ったら——」
老婆は鋼鉄のように冷たい視線を彼に投げつけた。「悔い改めよ、罪深き者、手遅れにならぬうちに。汝のその残酷非道な魂を洗い清め、正当な持主であるあたしに金を返さぬうちは、かわいそうなクリス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

トファーの魂も浮ばれない」
「ばあさん――」
「返さぬ時は、復讐の刃が汝の胸をつき抜けるであろう」老婆はおどろおどろしい言い方をした。
「それはどういうことだ？」
「亭主のクリストファーは射撃の名手だった」老婆はさらに不気味さをつのらせて答えた。「何年も前、あの悪名高き禁酒法時代の申し子のギャングどもから身を護るため、亭主はあたしに銃の撃ち方を教えてくれたのさ。言っとくけど、サンプルさん、あたしも射撃の名手でね」
伊達男ジャックの顔色がいっそう白くなった。これ以上白くなりようはなかったのだが。彼は震える指を突き出した。「おれを脅す気か、ばあさん？」
「あたしの金を返してくれるかい？」
「ばかな！」
「どんな目にあってもいいんだね」
伊達男ジャックはわたしを見た。「モーガン、なんで手をこまねいてる？　ここからつまみ出すんだ！」
大あわてで、わたしは小柄な老婆を外に連れ出した。しばらくして戻って来ると、伊達男ジャックはブランディをトリプルで飲んでいた。顔色が少しよくなっている。「ばあさんはどうした？」と彼は訊いた。
「おもてに連れて行きました」
「精神病院にでもぶち込んでしまえばよかったんだ」
「いったい、どうしたっていうんです、ミスタ・サンプル？　何がなんだか、わけがわかりませんよ」

「おれにもわからん。キャリー・ネイション（正信的な禁酒運動指導者）みてえに、ここへ飛び込んで来て、おれの鼻の下にこぎたねえ傘をつきつけやがった。初め、何をわめきちらしてるのかさっぱりわからなかったが、そのうち、何が言いたいのかわかった。こういうことだ。ばあさんとその亭主が老後に農場か何かを買うつもりで、十万ドルをこつこつ貯めていた。四十年もこつこつっていうやつだ。

二週間前、二人は金を銀行から引き出して、亭主が農場を買う契約をしに、このヴェガスにやって来た。ところが、奴さん、ちょいと脱線して、訪ねる予定の不動産屋には行かず、ここに来たとばあさんは言ってるんだ」

「〈メロディ・クラブ〉に？」

「〈メロディ・クラブ〉にだ。ついでに、サイコロで十万ドル、そっくりすっちまった。二時間もたたねえうちにな。熱にとりつかれたみたいに賭に夢中になる奴が、どうなるかわかるだろう」

「ええ。いったん始めたら、やめられなくなります」

「よくある話さ。ところが、あのばあさんときたら、そんな事情を一切知らない。イカサマ賭博だとか何とか言い立てて、おれが十万ドルを盗ったとがなり立ててるんだ」

「ここじゃ、イカサマなんて金輪際ありませんよ」わたしは口を挟んだ。

「ばあさんは信じようとしない。だが話はこれで終りじゃない、とどめがあるんだ、モーガン」

「とどめ？」

「そうだ。金をすっかりすっちまったじいさんは、ばあさんに電話して、金をすっちまったことを話したんだ。〝おまえに会わせる顔がない、良心の苛責に耐えられない〟と言ったそうだ。それからどうなったか、わかるだろ？　じいさんはフーバー・ダムの展望台から、新聞売りのブロディみたいにダムに身を投げた。ばあさんがおれを人殺し呼ばわりするのはそのためだ。これでわかったか？」

「悲しい話じゃありませんか？　トラの子の十万ドルを失くして、それから――」
伊達男ジャックはわたしにじろっと冷たい一瞥を投げた。またいつもの姿に戻っている。そんな眼つきをする時は、黙れということなのだ。わたしは話を途中でやめた。
「おれたちのやっているこの商売はなかなか厳しいもんだ。こんな商売をやるからには、氷のように冷たい血が流れてなくちゃならねえ。さて、おまえだが、おまえは警備員としては有能だ。ただ、情にもろい点が鼻もちならない。ギャンブルの仕事には、お涙ちょうだいは御法度だ」
「わかりました」
彼は、それでよし、というようにうなずいて、「そこでともかく、おれはばあさんに言ったんだ。御亭主がフーバー・ダムから身投げしたことも、このクラブで十万ドルをすってしまったこともお気の毒だとは思う、しかし、それはしかたのないことでね、この〈メロディ・クラブ〉は結構繁盛している、経営は小規模で、シンジケートのような組織とはつながっちゃいねえ、おれには騙しとるなんて芸当はできないし、そんなことをすりゃ組織のおにいさん方が首をつっこんでくるんでね、と言ったんだ。この〈メロディ・クラブ〉は、まっとうな儲け率だけでやっている。そうだな、モーガン」
税務署の査察が来ない時は、儲けから一週千ドルを彼がピンハネしていることは知っていたが、「その通りです」と答えた。
「しかし、あのばあさんは聞く耳を持たないんだ。いいか、モーガン、ばあさんは木に群がったリスよりもうるさく騒ぎ立てて、あの傘をおれに突きつけた。おまえを呼んだのはその時だ。事のいきさつはわかったろう」
「はい、わかりました」
彼はちょっと、下唇を噛んだ。「どう思う、モーガン？」彼はとうとう訊いた。「復讐の刃だの射撃の

名手だのって話、ばあさんは大真面目で言ってると思うか？」
わたしは確信ありげに首を振った。「気に病むことはありませんよ、ミスタ・サンプル。こんな商売をやってると、時々、頭のおかしな奴にでくわすもんです」
「おれもそう思う」
「そうですとも」
次の日の午後、いつもの見回りを終えて警備員室に戻り、机の前に坐ったとたん、伊達男ジャックがわたしを呼ぶブザーが鳴った。わたしは事務室に駆け上がった。
彼は餌の時間を待っている檻の中の豹のように、ベージュのモヘアのカーペットの上をうろうろしていた。駆け込んで来たわたしを見て、彼は桜材の机のほうに行き、そこに置いてある封筒を取り上げた。
「御心配には及びませんよ、と言ったな？　今朝この手紙が来た」
わたしは封筒を見た。色は紫でセントポーリアの花の匂いがする。ラスヴェガスの消印だ。中から一枚の紙を取り出した。封筒と同じ紫で、こう書いてある。「眼には眼を、歯には歯を」文句はそれだけだ。アガサ・トレッドワージィという署名がしてある。
「きれいな字ですね」とわたしは感心した。
伊達男ジャックの鼻が赤くなった。「書きぶりなんぞ、どうでもいい、モーガン」
「書き方がしっかりしています」とわたしは思いを巡らしながら言った。「手書き文字の分析方法という通信教育をとったことがあるんです。それによると、このタイプの――」
彼はひやっとするほど冷たい視線をじろっと向けた。「くそおもしろくもない通信教育の話なんぞやめて、話を聞くんだ。封筒を開けさせて読みだすとすぐ、ルー・アンがブザーを鳴らして電話が入ってると言うんだ。おれは電話に出た。いったい誰からだったと思う？」彼はわたしの返事を待たなかった。

「そうだ」と彼は叫んだ。「いいか、あのばあさんだとわかったんで、こう言ってやった。おかしな手紙をよこして、その上、電話をかけてくるとは、どういう魂胆だ、とね。するとこう言いやがった。あたしの金を返す気になったかい？　おれは、とんでもねえ、と言って電話を切ったんだ」
「それで」とわたしは恐る恐る言った。「どうしてそんなに興奮なさるのかわかりませんね、ミスタ・サンプル。おかしな手紙と電話だけでは、かすり傷だってつけられやしませんよ」
「そうとも。だが銃は違う」彼はこわばった顔をして言った。
何も起こりはしませんよ、と彼をなだめたものの、彼がそれを信じたかどうかはわからない。わたしは本来の仕事に戻った。
その二日後の金曜日、また彼の事務室に呼ばれた。ひどい肝臓障害を病んでいるような顔をしている。眼の下にどす黒い隈ができ、チック症状の発作のように唇の左はしが引きつっている。
「昨日、この手紙が来たんだ、モーガン」
手渡された封筒は、今度は黄色で、バラの香りがする。中の紙にこう書いてあった。「審判の日は来たれり。アガサ・トレッドワージィ」
伊達男ジャックは言った。「ばあさんは、昨日、また電話をしてきた。まぬけのルー・アンが取り次いでしまったんだ。女が電話をしてきた時は、まずおれに確かめてから取り次げと口がすっぱくなるほど言っておいたのに。それにしても、あんな女をなぜクビにしないのか、おれにもわからねえ」
わたしにはその理由はわかっていた。間違いなく。だが、わたしは「ばあさんはなんて言ったんです？」と尋ねた。
彼は肩をすくめた。「ばあさんだってことがわかってすぐ、電話を切っちまった」
わたしは軽く咳ばらいをして改まった口調で話した。「前にも申し上げましたが、ミスタ・サンプル。

こんなことで動揺してはいけません。たかが、ばあさんじゃないですか。気違いかもしれませんが、無害な女です」わたしは彼の興奮を静めるような声で言った。
「そうとも。ガラガラヘビが無害なようにな」
「どうも腑に落ちませんね」
「昨晩のことだ。ばあさんは銃で一発、おれを撃ってきた」
「なんですって？」
「撃ってきたんだ！　銃でだ。バーン、バーン」彼はわめいた。
わたしは唇をなめた。「どこでです？」
「おれの家の前だ。時間は九時頃、家に帰りばなだった。ガレージを開けようと車から降りた時、ピューン！　弾丸は前のフェンダーに当たった。数インチ、はずれただけだ。おれは地面に伏せ、車の下にもぐりこんだ。もうおしまいだと思ったが、それからは何も起こらねえ。二十分ほどして這い出したが、あたりにはもう誰もいなかった。腰が抜けるくらい、びっくりしたぜ、モーガン」
「そこらへんのガキどもが空気銃を振り回していたのかもしれませんよ。ガキどもが銃を持ったら、どんな――」
「ガキが口径の大きい自動拳銃を持ってるって言うのか？」
わたしは耳を引っぱった。
「ばあさんの仕業だってことは確かだ」彼は続けた。「今日、これが来た。それでわかったんだ。届いてから十分も経っていない」
三通目の手紙。今度は封筒の色はベージュだ。プーンと白檀の匂いがした。手紙にはこう書いてある。
「警告を聞け。金を返せ。さもなくば、復讐の稲妻が、必ずや汝を射抜いて、あの世へ送るであろう。

アガサ・トレッドワージィ」
わたしはゆっくりと手紙をたたみ、封筒に戻した。伊達男ジャックは、わたしの右耳あたりを見ているが、眼はうつろだ。やがて、囁くように小さな声で喋り出した。「おれはこわい、モーガン。おまえが何と思おうとかまわない。こんな目にあうのははじめてだ。どうしていいかわからん」
「どうするおつもりなんです？」わたしは声を柔げた。
「おれがどうするって問題じゃない」彼はいつものように、意味ありげに眼をきらめかせた。「おまえがどうするかだ」
「わたしが？」
「ばあさんを見つけ出すんだ、モーガン。わかったか。おれが弾丸をぶち込まれる前に、あの気違いばばあを捜し出せ」
「かしこまりました。見つけましょう」
「ぬかるなよ」彼はきっぱり言った。
わたしは警備員室に戻って、専用電話で鷲のベニーに電話をした。
「トニー・モーガンだ」わたしは電話口の相手に言った。「眼の具合はどうだ、ベニー？」
「鷹みたいに鋭いぜ。どうした、トニー？」
「人捜しだ。名前はわかってる」
「なんて名前だ？」
「アガサ・トレッドワージィ」
「なんだって？」
わたしは繰り返した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.